

タンザニアの地方で活動する助産師

清水 範子さん(33)



タンザニア北西部タボラ州に来て約2年半。7000件以上のお産に立ち会った。妊婦がマラリアやエイズウイルス(HIV)感染の治療をせぬまま出産し、亡くなっていく赤ちゃんたちがいる。子宮破裂や弛緩発作で分娩時に亡くなる産婦たちもいる。呼吸不全の赤ちゃんを前



埼玉県出身。聖路加看護大大学院修士課程修了。日本キリスト教海外医療協力会派遣ワーカーとして活動。

に、手で酸素を送るアンビューバッグの手を止めたら命が尽きる現場があった。号泣し、嘔吐しているとまた次の産婦が来る。「死をみとりにきたのか」と自問した。タンザニアの乳幼児死亡率は出生1000件あたり76件。妊産婦の死亡率は10万件あたり950件。しかし、診療を受けられない子どもや妊産婦がほとんどだ。「せめて一度でも妊婦健診に来ていれば、母体と胎児の健康状態を確認し、対応できるのに」。そんな思いで、現在は三つの

村を回り、妊産婦と5歳未満児の健診を実施している。幼少時、造園業を営む父が

庭にプレハブを建て、日本で苦勞する外国人を助けていた姿がいつも頭にある。ヒロインが看護師になるアニメ「キャンディ・キャンディ」に影響され、マザー・テレサを敬愛してきた。

「活動は大河の一滴。小さな、限界ある活動」と自覚している。でも、母親たちに「ナオコにまた子どもを取り上げてほしいわ」と声を掛けられ、成長した子どもたちを見るたびに奮起する。「救える命がある。体が動く限り、続けたい」

文と写真・高尾具成